

インクルーシブ体育の創造

「共に生きる」授業構成の考え方と実践

● 草野勝彦・西 洋子ほか 著

● 市村出版 発行

● B5判128ページ

● 定価2520円

日本福祉大学教授
藤田紀昭

「万人のための教育 (Education for All)」を指し、特別な教育的ニーズをもつ子どもたちを支援しインクルーシブ教育 (Inclusive education) の促進を謳ったサラマンカ声明から13年、わが国では今年度から「特別支援教育」が学校教育法に位置づけられ、すべての学校で、障害のある子どもたちの支援をさらに充実させることになっている。時代の求めに答えるように書かれた本書ではあるが、構想自体は8年前からあったというから筆者らの先見の明に驚かされる。

「1章 インクルーシブ体育とは何か」「2章 インクルーシブ体育の基本課題」「3章 インクルーシブ体育における意識変容のプロセス」「4章 インクルーシブ体育の創造と展開」「5章 地域を拓くインクルーシブ体育ーインクルーシブ教育の実現に向けて」「付録 インクルーシブ体育に必要な専門的力を獲得するために」と、実際にインクルーシブ体育を経験した関係者などによる7つのコラムで構成されている。インクルーシブ体育は「それぞれにスペシャル・ニーズをもつ子どもが、自分とは異なる他者と共に身体活動を行う難しさを体感しながら、同時にそれを越えていく楽しさを共有する、そんな基本的な人と人とのかわりを、身体的な学びの場から保障する教育」(本書35頁)であり、その実現に向けた基本的な考え方と、実際の授業展開、そして、その事例が丁寧に記述されている。

本書は次の3点から、非常に高く評価できる。まず、障害のある子とない子の実際の交流を軸として教員や子どもの変化、授業展開について言及している点である。これまでも統合教育、統合体育という言葉はあったが、実際には障害のある子は見学だったり、障害のない子とは全く関わり合いがないことも多かった。しかし、ここでいうインクルーシブ体育はそういう形ではなく、同じ(すべて全く同じという

わけではない)運動やスポーツを体験し、互いが交流していくことが前提となっている。それ故に様々な形で葛藤が生じるが、それを乗り越えることで新たな段階へと展開することが述べられている。

2点目は、インクルーシブ体育における教師や子どもの変化の段階を整理している点である。不安や戸惑いを覚える段階、「ズレ」や「まさつ」を感じる段階、創造的挑戦に意欲的になる段階、共感・共振を経験する段階、「共に生きる」を自然に実感する段階の5段階論である。インクルーシブ体育における不安感や思い通りに授業がいかない現実、誰もが経験すること、その迷いや不安、困難自体を生かすことが創造的な授業を生む土台となるとしている。現場の指導者にある種の安心感と道標を与えてくれるものと言える。

3点目は、本書に書かれている理論は実践に直結しており非常に理解しやすいということである。抽象度が高く、現場から距離がある理論や考え方は、何か空々しく、「それは言っても実際は……」といったくなる。また、事例を集めただけの事例集では汎用性が低くなってしまふ。本書に書かれている理論はまさに現場で起こったことが基になっており、帰納的に理論がまとめ上げられておりわかりやすい。著者の4人はそれぞれにフィールドをもち、継続的に責任を持った関わり方をしている。そうした研究姿勢がリアリティと厚みのある記述、地に足の着いた理論展開を可能にしていると思われる。

ただ、欲を言うならば、子どもたちの評価をどうすべきか。ある基準を達成しなければ通知表上評価されない絶対評価の中で、子どもたちの努力と変化をどう示すのか具体的に知りたかった。また、自閉症やアスペルガー症候群、ADHDなどの子どもが示す不適切な行動にどう対処するのかについても具体的に示してほしかった。現場の指導者がインクルーシブ体育において困難を感じる大きな部分だからである。

本書は一人ひとりの身体の違いを認め合い、それを契機に様々な葛藤を乗り越えつつ互いに理解しあうこと、それが身体を資源とした体育であるからこそできる教育であることを教えてくれている。体育、スポーツ文化の創造という体育教育の新たな可能性を示した本書は、体育関係者必読の一冊である。